

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	長尾 琢磨
<p>主 論 文 題 名： 第二神殿時代後期のユダヤ人の石切墓—形態・分布が示すヘレニズムに対する相克</p>			
<p>(内容の要旨)</p> <p>本論は、第二神殿時代後期においてヘレニズムに直面することになったユダヤ人が、どのようにそれに向き合い自らの文化・思想を形作っていったのかを埋葬に関する考古学的研究から明らかにすることが目的である。「ユダヤイズムとヘレニズム」は古代ユダヤ教研究における一つの大きなテーマであり、古代ユダヤ教が成立していく中で、どの程度ヘレニズムの影響を受けているのかを検討することは、現在のユダヤ教やキリスト教の再解釈と理解に繋がる。このテーマについては、これまで文献史料研究が中心であり、考古資料からユダヤイズムとヘレニズムの関係を探る研究は数少ない。一方で、これまでの考古学的調査によって、考古資料による情報は多量に蓄積されている状況である。よって、本論では、考古資料に軸足を置いた研究によってユダヤイズムとヘレニズムの相克を検討することにした。</p> <p>ユダヤ人の埋葬は、鉄器時代Ⅱ期から第二神殿時代後期に至るまで、バビロニア捕囚を間に挟むが一連の流れに位置づけられる。そのため、ヘレニズムの影響を受ける前のユダヤ人独自の埋葬習慣を把握し比較する目的で、第一神殿時代を含め第二神殿時代後期までの埋葬を概観し、研究の整理を行った。鉄器時代Ⅱ期には横穴式の石切墓であるベンチ墓が主として利用されており、研究はベンチ墓に集中していた。とりわけ、家を模した墓の形態と集骨による再埋葬に関して多くの研究が行われていた (Mazar 1976; Barkay 1994; Faust and Bunimovitz 2008; Osborne 2011)。ベンチ墓には家族が死後も共に在るというユダ王国の人々の死生観が込められており、その形態と埋葬方法は家族・一族に重きを置いていたという指摘がなされている (Faust and Bunimovitz 2008, 162)。</p> <p>バビロニア捕囚時代からプトレマイオス朝時代のユダヤ地域では、鉄器時代Ⅱ期に製作されたベンチ墓が再利用されたが、セレウコス朝時代になると新しいタイプの石切墓であるロクリ墓がエルサレムに出現した (Kloner and Zissu 2007, 71)。それ以前にロクリは既に周辺地域の墓で採用されており、ユダヤ人のロクリ墓の起源は研究の争点の一つであった。また、ロクリ墓は多様な要素から構成されており、埋葬方法や副葬品、墓のファサードや内部形態など多岐に渡る研究が行われてきた。ここでは、そうした第</p>			

一神殿時代～第二神殿時代後期の埋葬に関するこれまでの研究を整理した結果、内部形態の研究の不足、定量的な研究の不足、ロクリ墓の研究がエルサレムとエリコを中心とした議論になっていることが問題点として挙げられた。

これらの問題を解決するため、本論ではまず第2章で、前2世紀におけるエルサレムのロクリ墓と同時期のヘレニズム都市のロクリ墓、鉄器時代Ⅱ期のベンチ墓との墓の形態を中心とした比較を行った。そして、第二神殿時代後期のエルサレムにおける埋葬の変遷を明らかにし、エルサレムのユダヤ人が埋葬に関してどのようにヘレニズムに向き合ったのかということを検討した。

ヘレニズム時代におけるエルサレムとヘレニズム都市のロクリ墓の比較では、エルサレムにおける前2世紀のロクリ墓は内部形態、墓に入るまでの構造、埋葬習慣の点で、ヘレニズム都市のロクリ墓とは異なっていたことが明らかになった。前2世紀のエルサレムのロクリ墓は、地表の外部構造を服喪の空間として利用し、集骨に適した母室、ロクリによって家族埋葬を行う墓であり、新しい構造であるロクリに関してもアレキサンドリアやマレシヤのロクリ墓における遺体を埋葬するプロセスを含めて採用されたものではなく、単にロクリの形態の借用もしくは模倣に過ぎないと考えられる。エルサレムの初期ロクリ墓におけるヘレニズムの影響は限定的であったといえるであろう。

一方で、エルサレムにおける前2世紀のロクリ墓と鉄器時代Ⅱ期のベンチ墓の比較では、ピットのある母室、特にコの字型の母室と埋葬方法、家族を意識した死生観という点で強い共通性があることが明らかになった。前2世紀のロクリは集骨に適した独自の変化を遂げており、このような集骨のための子室はベンチ墓にもリポジトリとして一定数確認された。このことから、ユダヤ人はロクリに影響を受けて、リポジトリを母室の3辺に配置するように変化させ、且つ一次埋葬と二次埋葬の両方を行うことができるようにしたことで、集骨による埋葬をより円滑に行えるように改善したと考えられる。

エルサレムにおけるロクリ墓の変遷の検討から、前1世紀末から1世紀にかけてユダヤ人の埋葬に大きな変化が生じていることが明らかになった。前2世紀にみられた家族を意識した埋葬習慣は時代を通して継続しているが、前1世紀末にオシュアリが利用されるようになったことに伴い、母室の形態は平坦型が過半数を占めるようになり、アルコソリアなど新しい構造がみられるようになった。再埋葬が行われる小型石棺は周辺地域に例がなく、考古学的な情報からは、ユダヤ人のオシュアリがヘレニズム都市の埋葬方法に直接的に影響を受けたものではないと考えられる。また、埋葬プロセスと埋葬空間という点で、ヘレニズム都市の埋葬習慣とユダヤ人のオシュアリの習慣は異なっている。従来の研究では、オシュアリの採用要因として復活信仰や富の蓄積が挙げられており、また、ユダヤ人の家族を意識した埋葬に個人が表面化してきたことから、ヘレニ

ズムの個人に対する認識がユダヤ人の考え方へと影響を与え、その結果がオシュアリの採用に表れているとも解釈できるかもしれない。しかし、考古資料・文献史料からこれらを直接的な根拠を持って示すことは難しく、オシュアリの採用について明確な要因を決定づけることはできない。少なくとも、考古資料に基づく情報からは、ユダヤ人とヘレニズムという関係で考えるべきではなく、ユダヤ人の再埋葬の発展として捉えるべきであろう。エルサレムのロクリ墓にみられる傾向から、埋葬がユダヤ人にとって自らのアイデンティティを形成する重要な要素であったことが分かった。

第3章と第4章では東地中海沿岸南部地域におけるユダヤ人の埋葬のヘレニズムに対する相剋を明らかにすることを目的に、墓の分布状況の検討を行った。東地中海沿岸南部地域は現在イスラエルとパレスチナ自治区に分かれているが、パレスチナ自治区の墓に関する考古学的情報は、イスラエルと比較して不足しており、同自治政府の文化財管理の状況も不明瞭な状況であった。よって、第3章ではパレスチナ自治区で聞き取り調査、考古学的踏査を行い、パレスチナ自治区における墓の調査・管理状況と墓の考古学的情報を把握し、パレスチナ自治区における第二神殿時代後期の墓の分布を検討した。

過去の踏査・発掘調査の情報を整理した結果、パレスチナ自治区の調査の多くは踏査であり、考古学的な情報を得ることが難しいものが多かった。加えて、墓は盗掘の主な対象となっており、パレスチナ自治区の墓の大半は遺物がない、もしくは極めて少なく、パレスチナ観光・遺跡庁も墓の年代をほとんど同定できない状況であった。また、パレスチナ観光・遺跡庁も墓の発掘調査を行っているが、定期的に独自の雑誌や報告書を刊行する体制がなく、そのほとんどが未報告・未整理の状態であり、それらの情報を活用することは困難であった。このような状況によって、特にイスラエルによる調査数が少ないユダヤ・サマリア地域間の墓に関する情報は不足しており、同地域の分布の不足を解消する必要があることが分かった。

発掘調査とその成果の整理・報告を行うことが、この不足を解消するために最適な手法であるが、踏査についても墓の図面や写真などの詳細な情報が不足しているため、本研究ではまずユダヤ・サマリア地域間の踏査を行うことにした。ユダヤ・サマリア地域間の大規模な墓地であるアブードとキルベット・クルカッシュ、小規模な墓地であるシンジル、アイン・シニヤ、ユダヤ地域の大規模な墓地であるテル・エン・ナスベについて考古学的踏査を行い、墓の形態や立地、周辺遺跡について記録し、大まかな墓の年代の推定を行った。結果として、盗掘の被害は深刻であり、表採土器でさえ十分な量はなかったが、アルコソリアなどの構造やフレスコ、土器から、ほとんどの墓がローマ時代～ビザンツ時代、特に1世紀以降の墓地である可能性が高いことが明らかになった。

考古学的踏査で得られた情報は、細かい年代幅での分布に活用することは難しいが、

過去の調査の情報を合わせることで、ユダヤ・サマリア地域間における第二神殿時代後期の墓の分布を検討できるようになった。分布からは、前2世紀から1世紀にかけてロクリ墓の分布がユダヤ地域から周辺地域に広がっていく傾向がみられたが、第二神殿時代とその後の時代の区別をつけることが現在の情報からは困難であるため、前1世紀以降の分布の展開については推測の域を出ないものとなった。ユダヤ・サマリア地域間における分布の空白は、パレスチナ自治区の情報の不足も一因であったが、同時に居住地の少なさや地形という点で第二神殿時代当時の影響も受けていることが考えられた。

第4章では、第二神殿時代後期の東地中海沿岸南部地域における墓の分布状況、墓の種類、埋葬方法を把握し、東地中海沿岸南部地域における多様な埋葬の中にユダヤ人の居住域における埋葬を位置付けることで、ユダヤ人の埋葬のヘレニズムに対する相剋を考察した。墓の分布を正確に把握するため、支配領域、地形、地質、居住地、街道から墓地の立地をまず検討し、その情報を踏まえた上で第二神殿時代後期の墓地の分布状況を確認した。

前2世紀の段階では、母室の壁に複数のロクリを設ける構造とベンチ墓が結びついてるのはエルサレムだけであり、それ以外のユダヤ人居住域の墓地ではベンチ墓や横穴墓が利用されていた。前2世紀のユダヤ人の埋葬に対するヘレニズムの影響は限定的であり、むしろエルサレム以外の墓地ではベンチ墓が新しく製作され、鉄器時代Ⅱ期の埋葬習慣が採用されていた。長方形ロクリ墓や個人埋葬はギリシア人やフェニキア人の入植地でのみ確認され、地形・地質的な要因から海岸平野では石棺墓が利用されていた。

前1世紀になると、ハスモン朝の領土拡大の影響で各地にユダヤ人居住域が作られ、従来の居住域も発展していき、それに伴うようにユダヤ地域全体でロクリ墓が広く利用されるようになり、イドマヤ地域や海岸平野にもユダヤ人墓地が作られていった。方形ロクリ墓は、前1世紀にはユダヤ人居住域で確立し、ユダヤ人を表象する墓になっていた。一方で、前2世紀のクムランでは中央山地とは異なる埋葬が行われており、前1世紀のヨルダンの谷の墓地群では中央山地とは異なる埋葬が主として行われ、ユダヤ人の墓地の中で墓の形態・埋葬習慣の違いが特にみられるようになった。この一つの要因は、ヘレニズムを含め異文化の埋葬習慣の影響ではなく、宗派や思想の違いであると考えられた。墓の形態・埋葬習慣の違いをユダヤ教の分派や思想の違いに考古学的に関連付けることは現在の情報からは困難であるが、ユダヤ人が多様な考えを持つようになったことが墓の形態・埋葬習慣の違いに影響していることは十分に考えられるであろう。

1世紀には前1世紀の分布範囲に加えて、ヘロデ朝時代のガリラヤ地域・サマリア地域の発展と拡大に伴って、ガリラヤ地域やサマリアの山地にもユダヤ人墓地が作られていった。前1世紀以降には、かつてのヘレニズム化と似通ったプロセスで東地中海沿岸

部地域の「ユダヤ化」が進み、それに伴ってユダヤ人はロクリ墓の拡散者となっていったといえるであろう。ユダヤ人の埋葬は1世紀になっても多様であり、前1世紀とあわせて考えると、第二神殿時代後期のユダヤ人の埋葬習慣は、ミシュナの埋葬規定とは異なり、必ずしも一律に規定されていたわけではないと考えられる。少なくとも、これらはユダヤ人とヘレニズムという関係よりも、ユダヤ教あるいは自らの在り方を問うたというユダヤ人の中での変化である可能性が高いであろう。

序章で述べたように、バビロニア捕囚から帰還したユダヤ人は、第二神殿時代の長い期間を通してユダヤ人独自の思想・文化を確立させてきた。後世に文書化されたミシュナにはロクリ墓がユダヤ人の墓として規定されていることから、最終的にロクリ墓をユダヤ人の典型的な墓としていることは明らかであるが、そこにヘレニズムがどの程度介在しているのかということが重要な争点であった。本論でこれまで検討してきた内容から、当初は鉄器時代Ⅱ期の埋葬習慣を伝統的なユダヤ人の埋葬として据えていたことは疑いないであろう。ベンチ墓から発展した方形ロクリ墓は、母室の壁に複数のロクリを設ける構造という点でヘレニズムの埋葬習慣の影響を受けながらも、家族を意識した死生観のもと行われる再埋葬という根幹ともいえるところは変えなかった。

その一方で、第二神殿時代後期を通じてユダヤ人の埋葬は多様であり、特に前1世紀のヨルダンの谷の墓地群の墓の形態と埋葬習慣は、中央山地や海岸平野のユダヤ人とは異なっていた。また、前1世紀末からオシュアリが採用され、ユダヤ人の主たる埋葬方法も変化した。方形ロクリ墓と異なる墓やオシュアリは、ヘレニズムを含め異文化の埋葬習慣とは結びつかないため、ユダヤ人が多様な考えを持つようになり、ユダヤ教あるいは自らの在り方を問うたというユダヤ人の中での変化の結果である可能性が高いであろう。前1世紀にユダヤ人を表象する墓となった方形ロクリ墓は、家族を意識した死生観のもと行われる再埋葬という点に関しては、埋葬方法がオシュアリへと変化しても前2世紀とは変わっておらず、総じて、第二神殿時代後期のユダヤ人の埋葬におけるヘレニズムの影響は限定的であったと考えられる。



## Thesis Abstract

No.2

fundamental principle of reburial with family in mind. On the other hand, in the first century BCE, differences in tomb forms and burial practices were particularly evident in Jewish cemeteries. This is most likely the result of changes within Jewish people, as they came to hold a variety of views and questioned their own ways of being. In general, the influence of Hellenism on Jewish burial in the late Second Temple period seems to have been limited.